日本記号学会第 45 回大会個人研究発表・要旨

2025 年 7 月 5 日・6 日

情報科学芸術大学院大学［IAMAS］

声の参与を伴うサウンドインスタレーションの表現研究
——「同質化」時代の参加型アートにおける他者性の考察を通じて

兒島 朋笑（情報科学芸術大学院大学[IAMAS]）

発表要旨：

本研究の目的は、参加型アート作品の制作と考察を通じ、自己の価値観や思考が他者によって形成されることの同時代的意義を提示することである。特に鑑賞者が経験する「当事者性」に着目し、同質化の時代における参加型アートの作品体験の意味を更新する。本研究は、関係性を重視するリレーショナル・アートに表現形式の影響を受ける。このアートは「鑑賞者の間に生まれる関係性」と「作品と鑑賞者の間の関係性」を含む（山本,2019)。『関係性の美学』の著者ニコラ・ブリオーは、それを 90 年代社会から失われつつあった人間同士の間隙を生む芸術実践と位置付け前者の関係性を重視したが、本研究ではむしろ後者の関係性の同時代的意義を重視する。

自作《あわい｜between us》は、声の参与を伴うサウンドインスタレーションである。本作はスマートフォンを介した通話による参加と、その対話の録音により構成されるサウンドインスタレーションの鑑賞という二段階の作品受容により構成される。対話では、現代の問題である同質化に関する主題を通じ、鑑賞者と作者の対話を通じた交換が行われる。その録音により構成されるサウンドは、対話を経るごとに変容し、作者もまた参加者との対話の影響を受ける。リレーショナル・アートが発展した 90 年代にはコミュニケーションは高速化し、現代の高度情報化社会ではさらなる機械化・効率化が進む。それに加え SNS 等のプラットフォームは、ユーザー間の比較や承認を通じ人々の同質化を加速させる。こうした変化は、「人間が不意に遭遇するショック」（宇野,2024）つまりは、固定化された観念が不意の衝撃により変容することを阻害する。発表者の実践では、対話によって引き出される同質化されていない個人の思考とそれを語る唯一性を持つ声という構造により、他者による自己変容を表現する。本研究では本作を通じ、芸術作品を、多くのリレーショナル・アート作品で目的化されてきた関係性を築く場ではなく、私たちが間隙から享受する固定化された観念の変容を自己変容の契機として再認する場と位置付け、自己を形成する関係性を参加として捉えることで、リレーショナル・アートをめぐる関係性の議論を更新する。

本発表は、まず現代における関係性の重要性について『関係性の美学』を参照し、現代の状況と比較する。次に、機械化やプラットフォーム上での比較、承認による現代の同質化によって私たちを取りまく多くの関係性が変容することの問題点を指摘した上で、現代の関係性について、宇野常寛の『庭の話』(2024)を踏まえ、参加型アートの作品体験を、関係性の中で生じる中動態的な動きとしての「庭」という手がかりから位置付ける可能性について述べる。これを通じ、関係性において、自らが他者に参加する当事者であるという「当事者性」を自作の作品体験によって再認識することについて発表者の主張を明らかにする。

リファレンス：

・山本浩貴(2019). 現代美術史-欧米、日本、トランスナショナル.中公新書
・ニコラ・ブリオー. 辻憲行(訳) (2024). 関係性の美学 水声社
・宇野常寛(2024). 庭の話. 講談社